

第40回あいち学童保育研究集会レポート（20240303）

（ あおぞらクラブ ）（ 寛 由衣 ）

今回の愛知学童保育研究集会では第9分科会の「子どもの自発性を引き出す方法」という分科会に参加しました。

分科会は「子どもたちの自発性を引き出す方法はあるのか？」とはじまりました。が、冒頭の段階で講師の先生が「そんな方法は存在していないし、存在していたらすでに皆さんの手元にその方法は渡っている」と言っていたのに対し、方法がないからものがくという意味で（方法があったとしてきつと子どもたちには通用しないと思うけれど）、だからこそ指導員は現場で子どもたちの気持ちに寄り添うのだろうなと思いました。

“子どもたちの気持ちに寄り添う”という聞きえがいいないつも思います。困ったとき、冷静に話してくれる子もいれば、怒ったり泣いたりしながらも話してくれる子、一切何も話してくれなくなる子、そういった気持ちを出してるんだと思うけれど全く見えてこない子…。

あたりまえだけれど、子どもたちは常に気持ちをまっすぐに伝えてくれるわけではなくて、簡単ではないし、なかなか指導員が困ったり、失敗したり、結果オーライにしかできなかつたり、の繰り返しです。そんな中で困りごとが起こったとき、じゃあこの困りごとに対して、どんな風に子どもたちの気持ちに寄り添っていけばいいんだろう？なんてのんびり考える時間は（私の体感かもしれませんが）現場にはあまりないように感じています。

例えば、宿題という材料で考えてみたとき、指導員（大人）は、宿題をする・終わらせるという事実目的を置くけれど、子どもはそこに目的を置いていないから、目的のずれで指導員（大人）は話を聞いてもらえていないと思ってしまいがち、という話になりました。

宿題をするという事実を目的にする指導員（大人）に対して、例えばだけれど、宿題が学童で終わっていれば家でゲームができる（宿題をするための目的）という考え方や子どもたちの目線で彼らは宿題に取り組んでいるから、指導員（大人）と子どもで目的のずれを生んでいるそうです。

この話から、宿題1つとっても子どもたちの様々な感情があらわれているなかで、おやつを食べたり遊んだりという1日に目を向けたとき、学童の中は、子どもたちの様々な気持ちであふれかえっているんだなぁと改めて考えさせられました。

その中から子どもたちの気持ちがどこにあって、子どもたちがどんな目線を持っているかを考えることは容易ではなくて、その気持ちをすべてくんであげられるときと、そうでないときがある（もしかしたらそうではないことの方が多い？）から、“子どもたちの気持ちに寄り添う”ということをしようとしたときの手段として“共感”があるんだなと気づきました。

私は、どうしても子どもたちにしてほしいことを伝えすぎてしまうことがあるけれど、そんなふうにやることをプラスしていく形ではなくて、今まで以上に共感するという姿勢を持つことや、子どもの思いと指導員としての思いの妥協点（歩み寄り点？）を探してみると、お互いに気持ちよく生活できて、子どもたちの変わらない姿にイラっとすることも減り、今以上に子どもたちの気持ちの波に振り回されていけるのかもしれないと思いました。